

冬の自然菜園

徳野 雅仁

春から夏にかけて畑を席卷していた夏芋にかわり、秋に芽生えた雑草群が畑を緑一色に変えています。秋まきのホウレンソウやコマツナ、シュンギク、ダイコンはすでに収穫期に入り、ハクサイも十二月に入ると収穫期を迎えます。春に植えたサトイモ、ショウガも収穫期です。サトイモは霜が降りると一夜で葉がしおれますが、これが収穫の合図です。

収穫は、株元から少しはなれた場所にシャベルを深く入れ、土を起こすように掘り上げます。サトイモは利用する分だけ掘り上げ、残りはそのまま畑に残しておけば春まで保存できます。翌年のタネイモ用には、植えつけ直前に掘り上げ、できるだけ大きいものを選んで植えつけます。

無肥料栽培の効果ははっきり味覚に表われる代表的な野菜です。

ショウガも霜に合うと枯れ、利用する分だけ引き抜いて収穫します。サトイモ同様、これもタネショウガとして利用できます。

寒さに向かう十二月。自然栽培では寒害も少なく、丈夫に野菜は越冬します。根が十分に張らないうちに一気に大きく生長する多肥栽培と違い、じっくりと根を張りながら自然界のミネラルを吸収して育つたくましさによるからでしょう。多肥栽培では、無理な生長を強いる分、軟弱に育ち、病気への抵抗力も弱く、老化も早くなり、冬の寒さに耐えることができませんが、自然栽培では雑草との共生で、株元の凍結や乾燥害が防げ、病気

にもなりません。

サヤエンドウは、幼苗で越冬しますが、周囲に草があれば寒風が避けられ、風雨による倒伏も防げます。雑草に自らの巻きヒゲを伸ばして固定するからで、草があり、倒れなければ葉も汚れず、病害も出ません。

真冬は土壤の乾燥期でもありますが、草があれば土壤水分は保たれ、よほどの事がないかぎり水やりは不要です。もし灌水する場合は、晴れた日の温かい日中に。夕方に水をまくと凍って作物に影響がでます。

厳寒期に入っても、暖かい日には、ナナホシテントウが二匹ずつ連れだつてアブラムシを食べに畑にやってきます。寒さに負けず底冷えの畑で野菜を食べる虫もいます。アブラナ科の葉に小さな丸い食跡を残すヤサイゾウムシの幼虫です。普段は葉柄のつけねの内側に一匹ずつひそんでいます。また、ホウレンソウなどの葉柄にかじった跡があったり、折れていたら、カブラヤガ（ネキリムシ）の幼虫によるものです。東西一列に栽培しているなら、南側の日の当たる暖かい株元の土を掘ってみると、浅い位置にこれもほぼ二匹ずつひそんでいます。夜、地上に出て食害しますが、ときおり地中に戻る前に暖かい朝日を浴びて、そのまま土の上で、気持ちよく眠ってしまうものもいて、そっと土をかけてやりたくなくなります。

（イラストレーター イラストも筆者）

